(7) 二十四人戦死墓

慶応四年(一八六八)、街道を望む稜線に軍を布いた会津軍と街道を北進してきた西軍との戦いでは、大内沼あるいは追分沼と呼ばれた静かな沼周辺でも、多くの戦死者を出しました。

写真は、西軍戦死者の墓碑で、側面には明治四一年(一九〇八)の刻書が見られます。以前は大内沼の畔にありましたが、大内ダムの建設に伴い現在の地に移されました。

また、これより南、大内村の墓地にも笹沼金吾という会津藩士の墓がひっそりと建っています。会津軍が大内を退いたあとも一人水車小屋に身をひそめて戦い、銃弾を受けた遺体はそのままさらされ、これを哀れんだ村人がひそかに葬ったと伝えられています。

大内沼は、安政二年(一八五五)村覚によると、「氷玉峠之麓追訳ヶ申所、廻リ拾三丁、深サ弐三間、宝暦七丑六月十八日、山崩沼ニ相成申候」とあります。

英国の女性探検家イザベラ・バードが「小さな美しい湖」と評した大内沼も、沼の畔を回遊した旧街道も、今はダムの水面下となっています。